

ずいそう

大震災復旧工事・復興工事の協力体験

吉田道信



震災との関わり

1993年7月12日、北海道南西沖地震、最大の被災地であった奥尻島にも営業所があった。復旧作業に従事、2年経ってもまだ終わらない工事…そこに今度は、関西で1995年1月17日5時46分52秒に発生した兵庫県南部震度7の地震による大災害が発生。のちに名称が「阪神淡路大震災」となり、日増しに甚大な災害であることが報告された。大阪営業所は復旧・復興の下支えをする建設機械を提供すべく当初はほぼ徹夜作業が続いた。5年で落ち着きを取り戻したことで東京勤務へと異動となったが、その6年後、2011年3月11日14時46分18秒に東日本大震災が発生。震災に対して災害協定を締結しており東北電力に必要機材を提供した。その後、熊本地震等災害においては色々な意味で携わることとなった。災害には一時的に多くの建機が必要で、それを準備できるのは広域レンタルを主業としている我々のような企業である。この体験を報告する。報告にあたり震災で亡くなられた方々にはお悔やみを申し上げる。

阪神淡路大震災

災害当時、自分は北海道勤務で、震災は、ニュースで知った。弊社は西日本に営業展開すべく大阪に営業所を1994年10月に開設し、営業展開を進めていた。開設間もない営業所では、新人ばかりの対応で業務が麻痺していた。急遽大阪に応援に行かなければ復旧工事に使う建設機械の準備に支障が出ると判断し、会社より、対応できる人事として、指名を受け赴任することとなった。私が赴任したのは地震発生後まもなく。右も左もわからない状態で、バググ一つで大阪営業所のある東大阪へ向かった。降りた駅は自分と同じ名前の「吉田駅」。この時点で何か因縁を感じた。すでに倒壊した家屋の解体に必要なパワーショベル、ダンプなどの手配の依頼が殺到していた。まずはどの程度の被害なのか現場の視察に向かったが、ご存じの通り阪神高速は倒壊しているので中国道経由で神戸まで移動した。阪神高速で30分程度で到着する距離だが、中



国道で向かうと渋滞もひどく4時間かかった。

長田地区や神戸市役所などを視察し、カメラも趣味の一つなので記録用にシャッターを切っていたが、撮っているうちにあまりのひどさにシャッターを切ることが出来なくなった。それだけ衝撃が大きかったことを記憶している。

弊社は、建設機械の調達が本業であるが、広域レンタル企業としての立ち位置としては、地元の同業他社もかなりの企業数があるため、今回の震災のような一時的な期間でのオーバーストックは避けたいところだ。しかし、我々は全国に営業所があるので復旧復興が終われば、全国にばらまけば何とかなる。パワーショベル800台、ダンプ1000台を確保するために北海道や東北からチャーターフェリーで毎日のように移動を行った。

それでも不足しているのので、各メーカーに「あるだけ持ってこい！」と言って拍車をかけた。このような状況なのでビジネスという枠を超えて復旧活動に協力

させていただいた。建設機械も通常の使い方ではなく、無理のある解体でパワーショベルのアームがねじれて破損するという、経験のない修理も多数発生した。仮住まいするためのマンションもなかなか見つからずしばらくは営業所の2階に布団を敷いて寝ていたが、ダンプの出荷は夕方入荷して点検整備を行って、100台程度を出荷するころには朝になっている。結局はほとんど寝られない時期が結構あった。その時に入社した社員は最初に鍛えられたので、いまだに誰一人、退社していない。

東日本大震災

2011年3月11日14時46分18秒に東日本大震災が発生。自分はその時飛行機の中におり揺れを感じていない。函館に到着しニュースを見てびっくり、畑が海になっていた。函館の駅前も津波の影響で通行止め。

ホテルもやっと予約が取れたが深夜に余震が続き、まともに就寝できなかったことを覚えている。

翌日一番で東京に戻り状況を確認した。すでに東北方面に復旧に必要な建機の移動は始められていた。弊社の仙台営業所も津波に呑み込まれ壊滅状態。東京から支援物資を持ってゆくにも人が見つからず、自分の部署のトラックで走る事となり、亀裂の入った東北道を緊急車両の申請を行い現場へ向かった。中心地に行っても真っ暗で行き先がよくわからない中、弊社の営業所で工事用夜間照明を点灯していたので、唯一それが目印になった。夜通しで支援物資を搬入して夜が明けてきたころ、ちょうど仙台空港を通過。飛行場ががれきの山で空港とは言えない状態になっていたこと



に衝撃を覚えた。弊社の営業所の社員向けの食料等を届けたが翌日は東北電力向けの救援物資の配送。テント類を配送したが、すでに全国の電力会社から応援がきていたことを知り電力会社の連携に脱帽だった。

翌日東北から関東にかけて燃料が不足し、東京でも手配できなかったので、供給可能な浜松市まで車を走らせ仙台に届けた。3日間連続で仙台を往復し睡眠時間は2時間程度。こんなことを繰り返し今日に至っている。災害にあった時はみんなで助け合い連携を取ることが大切である。大阪の時も全国から応援隊が集まり業務に参加したが、社内ルールが整っていたおかげで、特別な打ち合わせをしなくても淡々と業務が遂行できた。徹夜続きにも誰も文句を言う者は現れずチームワークで乗り切りきれた。この経験があったからこそ人命の尊さや応援、救援等、助け合いで勇気づけられることを肌で実感できた。これからも誰かのためになることを心掛けて、仕事も私生活もできれば良いかなと感じている。

—よしだ みちのぶ

(株)カナモト 営業統括本部 ニュープロダクツ室—